



リズムで熱狂♪ Masaya's Bootcamp へようこそ!

阿部雅也

「阿部先生の授業ってすごい生徒の声が聞こえてくるよね。あれ何やってるの?」「教科書読ませてるんですよ。」「え?!教科書の音読であんなにノリノリなの?」私の授業と Billy's Bootcamp には共通点がある。一つめはやってる本人がノリノリ(笑)。二つめはリズム・テンポ・スピードを大事にしてやる気を引き出すこと。私が仕掛けることで、教室は割れんばかりの声が出る Bootcamp 空間に。以下に私の「仕掛け」を紹介する。

■リズムで感じる単語アクセント

下の単語を2拍子のメトロノームか手拍子とともに発音してみてください。



gui-tar pi-a-no mu-sic in-ter-est-ing
● ■ ● ■ ● ■ ● ■ ...

弱音節は前後にはじき飛ばしてアクセントのある強音節を中心に発音しなくてはいけないのがお分かり頂けたらどうか。慣れれば誰でもすぐに出て来ようになる。ただ教師のモデルの後について練習しているだけでは「自分で」読めるようにはならない。ペアで交互に単語リピートをする。ジャンケンで勝った人が先生役(実はこっちが大変)。相手を正しいリズムでリードする。教室中央に置くメトロノームは2拍子で鳴らしっぱなし。各ペアが気が済むまで繰り返しているので進度がバラバラになってしまうがそれでよい。各自が異なった単語の発音をしているのに、リズムと強勢だけは揃っているという不思議な一体感。リズムで心が解放され、アクセントの位置が体にな

じむから自然と声が出る。教室を見渡して頭が縦横に swing してきたら、場が暖まってきた証拠だ。

■「おとなしクラス」も騒然のリズムボックス

リズムボックスとは、自分で設定したリズムを自動再生させることができる機械で、あらかじめドラムやベース等の音色が入っている。



私が使っているのは『BOSS DR-3』(上写真)。設定できるテンポは rock, ballad, funk, jazz, samba など全100パターンで、操作も至って簡単。スピードの設定も自在なので、緩急揺さぶりをかけて徐々にハードルを上げて行くことができる。シメは10代が好むクイックビートで絶叫マシンに。教師もノリノリ DJ 気分で楽しめる。

■音節のリズムをつかみカタカナ読みを脱出

単語だけでなく、文レベルでもリズムボックスは活用できる。テンポのある良質の音読教材は歌詞や諺、チャンツなどそこら中にゴロゴロしている。例えばロマン派の英詩をリズムボックスに合わせて読むこともできる。(1行4拍)

“Pipe a song about a lamb!” 羊の歌を吹いてみて

● . ● . ● . ●

So I piped with merry cheer. 陽気な歌はいかがかな

● . ● . ● . ●



“Piper, pipe that song again.” ネエもっかい吹いてみて

● ● ● ● ● ●

So I piped: he wept to hear. 聞いたら彼泣いてたよ

● ● ● ● ● ●

(William Blake: *Songs of Innocence* より, 訳は筆者)

一行目は

パイプ ア ソング アバウト ア レームとすると

● ● ● ● ● ●

6 拍になるが、正解は

パイパ ソーング アバウタ レーム。

● ● ● ●

英語では弱音節である a や with がストレスのある強音節に磁石のように吸いつく、つまり音節 (syllable) が一つの単位となり一定のリズムを刻む。一方、日本語では拍 (mora) が単位。俳句の五七五で文字数を数えるように、1 拍はひらがな 1 文字に相当する場合が多い。生徒がつまずくのは「パイパ、アバウタ」のリズムだ。これをくどくどと教師が説明するのは NG。リズムボックスを“funk”に設定してこの詩を音読すれば、生徒が N.Y. ラッパーに大変身。「できる→楽しい！」から、子どもたちは自分で音節のルールを発見する。

■声の出やすい雰囲気作り

●自信をつける魔法の声かけ：ダメ出しだけの授業ではシラけてしまう。「あれっ！今の th の発音は誰？プロ並み〜！」褒められれば声が一段と大きくなるのが人の心理。教師＝役者。実際にそんな子はいなくても作戦として褒めることも（笑）。●恥ずかしさへの配慮：こんなことはないだろうか。音読が終わった人から座りなさいと言うと、最後まで残った生徒がハッと周りを見ていそいそと席に座る。「立って 1 回、座ってもう 1 回」と指示しておけば OK。全員 2 回目に入ったのを見計らって Stop。これで全員が最低 1 回は練習できる。

■音読テストで伸びる技能

音読テストを実施し、ビデオ撮影する。英語は技能教科、できてナンボだ。期限を設けて生徒を到達目標に着地させるのがねらい。音読テストの日はタスク導入時に予告しておく。制限時間や正確さ、リズムなど厳しい合格基準もできるだけ具体的に伝えておく。テスト当日までの練習計画マネジメントはペアの責任。前回の音読テストのよい例をビデオで見せて違いを気づかせれば生徒の心が動き、自分たちで練習を始める。



いつものテスト手順は次の通り。①空き教室や階段の踊り場で、ペアごとに撮影（左写真：私が横で合格判定。ビデオカメラは固定して録画しっぱなし）。②他の生徒は教室で待機、自分たちの番が来る前にテスト場へ移動する（流れをスムーズに）。③テストを終えたら教室に戻ってペア学習。

私の合格判定は超厳しい。生徒は受かるまで挑戦するが、その時間中に全員合格させるのが鉄則。そのうちにグルグル何回も列に並ぶ者も出てくる。カメラの横には練習中のペアの列ができ、うまいペアの発表から「まねぶ＝学ぶ」ようになる。「受かった〜！」と小躍りしながら教室に戻る生徒の姿は感涙もの。節があるから竹は伸びていく。音読テストはその節の 1 つだ。どこに、どんな「節」を設けるか、すべては教師のマネジメント。

* *

リズムがあると心地よく、つい続けてやりたい気持ちに駆られるのではないだろうか。音読、教師の指示、活動のコマ、音読テストなどに計算されたテンポがあり少しのゆるみもないこと。これが生徒のやる気に火をつける Masaya's Bootcamp の「仕掛け」だ。

（あべ まさや・新潟県立村上高等学校教諭）